

『りんごの花』

小一・□□□□

ぼくは、「りんごの花」をよみました。本の、りんごの花がきれいだったから、えらびました。おかあさんに、りんごの、せんていの話をしました。すると、おかあさんは、十年まえまで、りんごえんだったんだよと、おしえてくれました。この本のりんごえんは、木が百本だったけど、ばあばんちの、りんごは、二百本もあったそうです。おかあさんは、なくなつて、さびしいといつてたけど、ぼくは、だいじょうぶだよといいました。だって、ぼくのおうちの、うらやまは、りんごえんだからです。

『あらしの夜に』

小三・□□□□

わたしが、『あらしの夜に』を読もうと思ったのは、全部のページに絵が付いていて、おもしろそうだったからです。この本は、やぎのメイと、おおかみのガブが、あらしの夜にまつくらの小屋の中で出会つて、おたがい自分のなかまたと思ひ込んで、いろんなお話をして、友だちになるという物語です。

私が、とくにおもしろいと思つたところは、メイとガブの会話です。二匹とも、とてもおなかが空いていて、食べたいもの話をしてるとき、会話はつながっているのに、頭の中では、別の食べものを想ぞうしているところ。メイは、おいしい草を、ガブは、やぎの肉を想ぞうしていました。

二匹とも、カミナリがいて、あらしの中は、とても不安でした。ガブは足もくじいていました。でも、話の合う相手がいて、とてもうれしかったんだと思います。だから二匹は、次の日に会う約束をしたのでしよう。でも、わたしは、メイがやぎだと分かつたら、ガブがおそいかるのではないかと心配でした。ところが、続きを読んでいくと、二匹は、やぎとオオカミだと、おたがい分かつて、仲のいい友だちでいたのでよかったです。

『バムとケロのむりのこや』

小三・□□□□

このお話は、犬のバムとカエルのケロが、暖かい木曜日、近くの森へ、きいちこをつみにいったら、そこで、つる草におおわれた、古い小屋を見つけたというお話です。

私の心に残つたことは、小屋のそうじをしている時に、ケロが、「ミを拾わないで、古いカビカビのドーナツや、ほこりまみれのクッキーなんかを食べるところです。

心に残つた理由は、ケロには、古いカビカビのドーナツなどを食べる勇氣があるんだなとびっくりしたのと、ふしぎと、その場面が大好きだし、心に残つたのだと思います。私だつたら捨てていました。

次に心に残つたところは、ひみつの星を見る会のじゅんびをするところ。じゅんびができて、あとは、星が出るのを待つだけ。なのに、みんな疲れてウトウトしたところが、おもしろかったです。それに、しばらくして、なにかがコンと頭に当たつて目をさますところ。いつの間にか、小屋の中は友だちでいっぱいになっていて、おもしろかったです。

『トットちゃんの十五つぶのだいず』

小四・□□□□

私が、『トットちゃんの十五つぶのだいず』を読もうと思つたのは、戦争のときに、ひとびとが、どんなくらしをしていたのかを知りたかつたからです。

戦争が起きる前は、食べ物がたくさんあつたけれど、戦争が続くにつれて、食べ物や家がなくなつていくということがいちばん心に残りました。

なぜ、心に残つたのでしょうか。戦争が起きると、食べ物なくなつておなかが空くからです。住むところがなくなるからです。トットちゃんはお母さんのお弁当が大好きでした。でも、ある日、とうとう一日の食べものが、十五つぶの炒つた大豆だけになってしまいました。朝、封筒に入った大豆をお母さんが渡してくれました。お昼、トットちゃんは考えました。「食べるものがなくなるから、ここは、がまんしよう」と決めました。七つぶは残して、家に帰つて夕食に食べることにしました。そうしたらがまんができて、夕飯に、残り七つぶの大豆を食べることができました。

この本を読んで気づいたことは、いままで、私は、つい、たくさん取り分けてしまつて、食べきれないで残していたことがあつたけれど、これからは、食べられるだけのぶんにして、それをむだにしないよう、

たいせつに、きちんと食べるようにしたいということです。

『先生、しゅくだいわすれました』

小五・□□□□

私は、「先生、しゅくだいわすれました」という本を選びました。この本を選んだ理由は、この『先生しゅくだいわすれました』という題名が気に入つたからです。

この本は、一日にひとりずつ、クラスの誰かが宿題をやらなくて学校に来てしまいます。宿題を忘れたことを先生に許してもらつたために、みんなの前で、その理由を言つたという話です。

私が、この本を読んでみて思つたことは二つあります。一つ目はクラスのみんなの「宿題をわすれた理由」についてです。なぜかといつと、いろいろな理由の中には、「宇宙人に勉強を教えたりして忙しかつた」といふような、とんでもないものが、たくさんあつて面白かつたからです。もともとは、理由なんてなくて、言い訳していたのに、クラスのみんなに、楽しんでもらうような理由をいっしょけんめい考えるようになっていきます。でも、そんな作り話を考えるよりも、宿題をするほうがよっぽど楽で大切なことにだんだん気づきます。

二つ目は、先生も、なんといいことが宿題づくりをうっかり忘れてしまいました。こんどは、先生が、「宿題を作り忘れた」理由をみんなの前で言つたところ。先生も先生で、正直には言わないでいて、わざとウソの理由を言つていたのが、おもしろかったです。最後には、このクラスにす「いい」ことが起きるので、ぜひ、読んでみてください。

『泣いた赤おに』

小六・□□□□

僕は、先生に勧められて『泣いた赤おに』を読みました。このお話は、人間は怖い鬼を遠ざけていましたが、主人公の心やさしい赤おには、前から人間と仲良くしたいと思つていました。その話を聞いた青おには、わざと悪者になつて村の人たちの前で、赤おにからやつけられる芝居をすることにしました。これは、うまくいきました。赤おにが、たんごぶのできた青おにを助けるところも、村の人たちが見ることができたので、赤おにのことを、優しい鬼だと思ひ始めました。それからは、村の人たちも、赤おにといっしょにお茶を飲んだりして仲良くするようになりました。

一番心に残つたところは、青おにが、赤おにを心配して、気を使つて自分から山を出ていく場面です。友達赤おにのために旅に出るところに、僕は、なぜだろうと思ひました。よけいに、さびしくなるのにと思ひました。でも、村の人の気持ちもわかります。自分も同じです。村の人たちは、赤おにの、友だち思ひの姿を見て、気持ちが変わつたのだと思います。この本を読んで、自分が変わったのは、人を見た目だけで判断しないということです。

『高遠少年の事件簿』を読んで

中三・□□□□

私が、この本を読もうと思つたのは、今まで私が、よく読んでいた「金田一少年の事件簿」に出てくる「地獄の傀儡師、高遠遙一」が、これほどまでの犯罪者になつた理由を知りたかつたからです。高遠遙一は「金田一少年の事件簿」では登場人物の一人でしたが、この本では主人公として描かれます。高遠は、天才マジシャンの息子でした。留学先のイギリスから帰国して、秀央高校に入学したところから物語が始まります。

この本のあらすじは、まず、高遠は高校のマジック部に入ります。ところが、その部活では、次々と殺人事件が起きてしまいます。高遠が謎を追つていくと、その犯人から、自分の宿命をまざまざと見せつけられるという物語です。

私にとつて印象深く残つている場面は二つあります。一つ目は、高遠は事件が起るたびに、現場のようすを自分で一通り調べたり、刑事の推理が違つたりすると、冷静に、はつきり、そこは違つと言つたり、自分の考えをきちんと伝えるのが、すごかつたところ。二つ目は、高遠は事件の犯人のところへ一人で向かうのですが、そこでは犯人を前に、犯人が事件で使つたトリックのネタばらしをして見せるのです。なに「こと」にも決して物怖じしないところが、すごいと思ひました。

どうして高遠が冷酷な犯罪者になつたのか。私はこの本を読んで、その謎が、ついに解けました。読んでよかつたです。